

三 衣食と云ふか、人格と云ふか

食はぬ日は經たぬと云ふが、既に生きて居るのが事實ならば、食はねばならぬのも事實だ。別に規則もなければ法律もないけれど、何時の世からの習はしぞ、或る少數の人類を除く外、一日に三度宛は食ふと云ふ掟になつてゐる。腹は空かないでも時間が来れば食ひたくなる。この食ふと云ふ事が、人生の價値を定める標準となつて、美しいものを澤山食べることの自由な人を富貴と尊み、不味いものを少許たべることすら困難の人を貧乏だと賤める。食ふことが出来れば、着ること住まうこと、此等の自由不自由に因つて、運不運成功不成功を定める。此等が自由に得たい爲に、七顛八倒して、而も長く生きたいと云ふ。けれど、是が果して態々此の世へ出て來た所詮であらうか。勿論誰しも自由の境界が望ましいが、此のみを以て人生の終極目的とするのは云何か。況んや此が爲に却つて四苦八苦の狂態を演ずるに於てをやだ。畜に生きることならば、禽獸の方が遙に上手だ。第一氣樂で重寶なことが、到底も比較になりますまい。

茲には一つ、生き甲斐のある意義ある生活を營まねばなりません。生き甲斐と云へば、其人の生れたのが、生れなんだのより、善いと云ふことである。生れても生れなくても同じ、生きてゐても生きてゐなくても同じと云ふのは、生れなんだ方が世話なしである。随つて他の邪魔をせられるやうでは、生れて貰はなんだ方が、餘程仕合である。總じて人は自分のためばかり思へば、却つて自分の爲にならず、他の爲にすれば結局自分のためにもなる。それで生れたからには、生れただけの事があり、僅なりとも進歩に與らなくてはならぬ。茶碗一つでも親の代よりも殖せば、それだけの生れ甲斐はあつたと云ふもの。とはいへそれだけでは情ない。進んで其人が居らなければ、お

座が持てぬと云ふ程にありたい。徒に造糞機では困る。

試に問を發して「汝何者ぞ」と云はんか、猫ならばニヤンと答へるであらうし、犬ならばワンと答へるであらう、馬ならばヒンと答へ、鶏ならばコケツコウと云ふであらう。若し夫れ人間ならば、必ずや怫然として「俺は人間だ、人間だが何か」と應ずるに相違ありませぬ。サアその人間、人間ならば人間であると云ふことを、一心に持つて失はぬやうにする。君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友、各其の分を守つて行くのが、少くとも世にある所以であります。自覺の曙光は爰に開けて參ります。責任の感は湧いて參ります。